

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2022年 1月 7日

学部・学科名 外国語学部・日本語学科

担当教員氏名 近藤 行人

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ 海外実習
2. プログラム名称	ハノイ国家大学外国語大学日本語教育実習
3. 渡航先国名	ベトナム（オンラインにて実施）
4. 派遣期間	2021年 3月 1日（月）～ 2021年 3月 12日（金） 12日間
5. 派遣先教育機関名	ハノイ国家大学外国語大学
6. 参加学生数	3名
7. 派遣目的	ハノイ国家大学外国語大学（以下、ULIS）学生を対象として、日本語授業の見学、オンライン教壇実習を行い、あわせて、異文化体験やULIS学生との交流の機会をもつ。
8. 派遣内容	① 事前指導 : 教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成などを行い、指導を受ける。 ② 授業見学 : ULISにおける日本語授業（オンライン）を見学する。 ③ オンライン実習 : ULIS日本語学科の授業において、各実習生あたり2回以上の教壇実習を行う。実習に先立ってULIS教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。 ④ 異文化体験 : ULIS学生との交流 ⑤ 実習報告書の作成

<p>9. 成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の実施（授業見学、授業の実施、振り返り） 「文型・表現」クラス、「会話」クラス、「作文」クラスにて各1回実習を行った。実習生は「普通の日本語授業をオンラインでする」のではなく、「オンラインだからこそできること」を考えながら実習を行った。 ・交流会の実施 ULIS 学生との交流会をオンラインで実施した。 ・報告書の完成 実習を通して学んだこと等をまとめ、報告を作成した。
<p>10. 備考</p>	

以上

教壇実習報告

今回、文法、会話、作文添削を各 1 回ずつ、計 3 回の教壇実習を行った。事前指導から実際の授業を通して、これまで対面授業をしながら身につけてきたものを再度学び直した実習であった。

初回は文法（[V 辞書形] のは [形容詞] です。）であった。結果としては、個人的には大失敗であると思っており、授業を受けてくれた学生に対し申し訳ない気持ちでいっぱいである。原因としては、自分の経験のために組み立てた授業になっていた部分が一番大きいのではないかと考えている。今回の事前指導（オンライン日本語教育）で学んだ練習方法を試してみたいという思いからいくつか盛り込んだのだが、そもそもオンライン上の授業に慣れていない状態でさらに新しい手法を複数取り入れるというのは無理があった。また、不慣れからくる不安さから教案通りに授業をコントロールしようとしてしまった部分があり、教材や教案は確かに自分が作成したものではあるが、果たしてこの授業を自分がやる意味はあるのだろうかと感じた。授業を行いながら、もう少し事前に学生の情報を伺い、それを反映させた内容にしたかったなど反省をした。今回用意した練習の提示順に関しても、内容の負荷を考え、もう少し検討すべきであった。授業時にお互い初対面かつ実習初日ということもあり、学生が非常に緊張した様子を見せていたのは仕方がないことだと反省会の際に言っただけだが、もう少し自分に余裕があればこの部分のフォローもできたのではないかと思う。ただ、全体的に反省点は多いものの、その分学びや気づきも得られたため、挑戦してよかったと思っている。

初回の反省を踏まえ、その後の会話と作文添削の授業では、なるべくシンプルな進行を心掛けた。また、自分に余裕を持たせるため、幾度も念入りに事前確認を行った。やっておいてよかったと感じたのは、デバイス別（PC、タブレット、スマートフォン）の受講側からの画面の見え方や、デバイス別やインターネット回線の状況によって遅延がどれくらい起こるか、授業中に不具合が生じた場合の別のツールに移行する流れの確認である。それでもツール関連で想定外の問題が生じたが、複数の選択肢を持っていたことで冷静に対処できた。

大人数で行う授業の場合は ZOOM のブレイクアウトルームのような機能は必要であると感じる。今回、会話および作文添削時にはこの機能を利用した。ペアやグループ活動をさせるためであったが、もう一つの狙いとして学生がクラスメイトや教師とよりリラックスした状態で交流する機会を設けるという意図があった。狙い通り、緊張が解け、気楽な様子で学生が話をしていた。また、各ルームを訪れると、二人で何を話していたか日本語で伝えようと試みる様子

が見られた。これは嬉しい想定外の効果であった。また、授業後に担任の先生がミーティングを抜けた後、自分のカメラを切ってしばらくミーティングを閉じずにおいておいたのだが、学生達がブレイクアウトルームで何をしていたか自由に話す様子が見られた。母語であっても、その日に何をしたのか互いに共有するだけでも復習の良い機会となるのではないかと思うとともに、授業外にこのようなやりとりが自然に行われることの方が実は重要なのではないかと少し感じた。今後、オンラインで授業を行う際には、こういった自由な余白の時間も取り入れていきたい。

個々でのやりとりや理解の確認を行うために Google form を取り入れたが、これに関しては興味深かったことが 2 点ある。1 つは提出率である。提出は自由とし、2 つのクラスに提示したが、初回の文法の方は数名しか提出していないのに対し、会話の方では半数以上が提出していた。この要因のひとつに授業の満足度が関係しているのではないかと考えた。もう 1 つは、提出者のほとんどが授業時にあまり発言をしなかった、もしくはあまりうまく話せない様子を見せた学生であった点である。取り組んだ学生は自分の疑問点や感想などを自由記述内に書きこんだり、間違えた箇所がなくなるまで何度も取り組んだりという様子が見られた。form のコメント返却後にメールで返信を送ってきた学生もいる。授業内の様子だけ見た場合、この学生達は積極性がないと判断される可能性もあるだろう。こういった部分をどう観察し、判断していくことができるか、考えていく必要があると感じた。

今回困難を感じたことについて、当初はオンラインだからではないか、普段通りの対面であればここまで問題は起きていないのではないかと考えていた。しかし、何度も自分の教材や授業の見直し、考え方の振り返りを行う中で、実は対面であってもこなせていなかったものが今回露呈しただけではないだろうかという考えに変わっていった。この無自覚な慢心への気づきが、今回の実習で得た一番大きなものであると感じる。また、全体を振り返って、序盤は機材や手法に振り回されていたのが徐々に自分らしさも取り込んだ授業へと変わっていったことに気づいた。対面であってもオンラインであっても、自分の中の軸のようなものは変わらないのだなと、非常に面白く感じた。実習先の先生方から頂いたお言葉や学生の皆さんの反応を振り返っても、この自分の核となる部分を中心に言及されていたり、反映されていたように思う。これに気づけたのは事前指導から継続して近藤先生と実習生の 2 人と共に自分の教育観や学習観といったものをじっくりと見つめてきたからだろう。

オンラインならではの授業とは何なのか、オンラインだからこそできる教育とは何か、まだ明確には答えられない。しかし、これらを常に自分に対して問いかけるようになったことで、ただ対面でやっていたことをオンラインで再現

するだけの授業やとりあえず ICT ツールを使っているだけの授業から脱却するための大きな一歩を踏み出せたと感じる。多くの学び、気づきを得る機会を与えていただき、この実習に関わってくださった全ての方に感謝を申し上げたい。

教壇実習報告

ZOOM を利用した実習ということで、対面とは全く同じ形での授業はできないので、ZOOM 上では一体どういった形の授業を行っていけばいいのか、そこから考えていきました。事前指導で、**先生から学んだ ICT 教育をもとにベトナムの学生の学習環境や、見やすいパワーポイントは何か考えたり、授業担当場所ではどんなことを目標に行うのかなど、ZOOM 授業だからこそその良さを生かして授業をしていきたいと考えていきました。しかし、実際に教案を作っていくのはとても大変でした。ZOOM での授業は受けた経験はあるのですが、実際に行ったことはないので、どういったことが起きるのが想定しにくく、また何のためにこの活動を行うのか、目標と活動が一致しているのかを考えていくのがとても難しかったです。

今回の実習では、文法と会話と作文の計 3 回の授業をする機会がありました。一回目の授業は文法授業（みんなの日本語ⅡL38A 1. 2）ということで、オンライン上で初めて会う学生たちとどんな授業ができるかとても緊張した状態で始まりました。インターネットの環境上、カメラを付けたまま授業が受けられる学生が少なく、反応があまり分からなく、不安になりながら授業を行ないました。また、名簿も ZOOM 上の名前もベトナム語だったので、インターネットで名前の読み方を調べて名簿にフリガナを付けて授業を行ったのですが、ZOOM 参加者名と名簿を行き来しながら名前を呼ぶので時間がかかってしまったり、読み間違っていたり、いろいろ失敗をしてしまいました。しかし、その中でも学生の皆さんがしっかり授業をうけてくださいました。学生のみなさんに助けてもらいながら授業ができました。

会話の授業（みんなの日本語ⅡL39 会話）では、「仕事の約束をしている日本人に遅れている旨を伝え、今後の仕事に支障がでないように謝罪をすることができる」が最終的にできることとして行っていました。時間調整がうまくできず、発展活動ができず終わりました。ZOOM を間違えて終了してしまったなど、ハプニングはありましたが内容確認、音読活動ができました。

作文の授業では、事前に添削をしてからクラス全体で確認したい点を見つけに行いました。今回は、作文の形式についてクラス全体で共有したいと思い、授業時間半分を使い行ったのですが、一度習ったことがある前提で準備をしていたので、事前確認の重要性を再認識しました。ただ、クイズ形式だったのでよくある間違いと正解を比較しながらできたのはよかったです。ブレイクアウトルームでペアの人と作文を交換して添削をしあう活動をしたかったのですが、活動の説明が足りず、***先生の助けをかりて行いました。頭の中で想

定している活動より、丁寧で分かりやすい指示が必要でした。

今回のハノイ実習では、オンラインでの授業のこと以外にも自分の教育観や教師観を振り返り、どういった授業を展開していきたいのかを再考する機会でもありました。目の前にいない学習者とどう協力しあい授業ができるかが、よりよい授業をしていくうえで必要であると実習を通して感じ、その経験を今後
も忘れず活かしていきたいです。